
サドで邪悪な召喚獣 i f ~ Berserker Princess ~

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サドで邪悪な召喚獣if\ Berserker Prince
s

【Nコード】

N2751Y

【作者名】

まあ

【あらすじ】

サドで邪悪な召喚獣ifシリーズ。第4弾です。今回のヒロインはまさかの『清水美春』です。人外父娘対いかれた科学者『前田理音』の対決はどうなるんでしょうか？

予習問題

『マイエンジェル、ドウシテオトウサンカラニゲルンダイ』

「こないで変態!!」

幼い日の記憶、かなり外れた父親を持つ少女『清水美春』は背後に真つ黒なものをまとった父親から逃げるように近所の公園を逃げ惑っている。

「リオ、どうしよう。変態がいるよ!？」

「変態？ あれが噂に聞くロリコンか？」

自分達から距離を取って行く人々のなかに同年代の少し頭が足りなさそうな少年と一見、少女に見えるような少年の姿が目の前に立っている。

「ど、どけて!!」

『ミハル、オトウサンガ!!』

美春は目の前に現れた少年2人にどけるように叫ぶが少女の足ではいつまでも大人の足から逃げきれぬわけもなく、父親が美春に向かい飛びかかるうとした時、

「リオ、な、何をする気!？」

「決まってるだろ。変態や犯罪者は血祭りあげる。社会が見逃す

んだ。俺がぶちのめしても問題ないだろ」

美春の目の前の少年のうちの1人は口元を緩ませると懐から花火を取り出し、美春に飛びかかるうとした父親を撃ち抜いて行く。

「な、何なのですか!?!」

「リ、リオ、やりすぎ!?!」

「おい。呆けてないで逃げろ。その程度では止まらないみたいだぞ」

美春は何が起きたかわからないようで目を白黒させるが花火を放った少年は美春の父親に止めを刺すに至らなかったと舌打ちをして美春に逃げるように言い、

「は、はいです」

『ワタシトマイエンジェルノジャマヲスルノハドコノブタヤロウダ』
『?』

美春は少年の言葉に頷き、駆け出すと彼女の父親は自分に攻撃を仕掛けた少年を敵とみなしたようであり、背後にまもっていた真つ黒なものを殺意に変えて少年に襲い掛かるように駆け出す。

「ちょ、ちょっと、リオ、どうするの!?!」

「アキ、下がっている。確かに人を威圧するものはあるが攻撃の動きとしては単調であり、当たる事はない」

少年は美春の父親の殺意に負ける気はないようで小さく口元を緩ま

せるともう1人の少年に下げると父親の攻撃を交わしながら花火で父親を撃ち抜いて行き、

「す、凄いです。が、頑張ってください。その変態を打倒してくださいー!」

『キサマハマイエンジェルニイロメヲツカウブタヤロウカ？ コロスコロスコロスコロスコロス』

美春は自分の事を助けるために身体を張っている少年の姿に彼女の小さな胸は小さく1度跳ね上がり、声を張り上げて自分のために戦う少年を応援するがその言葉は父親にとって少年に向けた殺意を引き上げる事にしかならず、

「リオ、逃げるよ!」

「アキ、何を言ってる？ 犯罪者を前に俺が逃げるわけに行くかぶち殺してやる」

少年は不利な状況ではあるが口元を小さく緩ませたまま、懐から今度は毒々しい色の液体の入った注射器を数本取りだし、

「……大振りの攻撃だな。頭に血が昇りすぎるとこんなものか」

美春の父親の大振りの攻撃を少年は交わすと少年の持つ注射器の毒々しい色をした液体は美春の父親の身体に吸い込まれて行き、

『グガガガッガ!』

美春の父親は壊れた玩具のように前のめりに倒れ込み、

「リオ、無事？」

「ああ。それより、アキ、逃げるぞ。面倒な事になりそうだ」

「うん」

後ろに下がっていた少年は激戦を終えた少年に声をかけるが大人が少年相手に殺意を向けていた事に誰かが警察を呼んだようで警察官2人が少年2人に駆け寄ってくる姿が見え、少年2人は逃げるように駆け出して行き、

「リオお姉さま？」

美春は命の恩人？に淡い恋心を抱いたようで頬を赤らめ、逃げる少年達の背中を見送るが少年を少女と勘違いしているようである。

第1問

「明久、この後、どうするんだ？」

「そうだね。ボクの家でゲームでもする？」

『吉井明久』は授業が終わり、同じクラスの友人である『坂本雄二』、『木下秀吉』、『土屋康太』の3人と放課後の予定を話し始めた時、

「よ、吉井くん、いますか？」

「あれ？ 姫路さん？」

同じ小学校出身ではあるが付き合いが薄くなってきた少女『姫路瑞希』が息を切らして教室に入ってきて明久の名前を呼ぶ。

「よ、吉井くん、大変なんです」

「ど、どうしたの？ 大変って何があったの？」

「あ、あの。前田くんのお母さんが事故に遭ったって、私のお母さんから連絡があって」

「前田くんのお母さん？ え？ 姫路さん、いきなり、そんな笑えない冗談を言わないでよ」

「冗談なんかじゃありません!!」

瑞希は瞳に涙を浮かべながら、明久の幼なじみの『前田理音』の母親である『前田怜奈』が事故に遭ったと話すが明久はいきなり聞かされた話しに頭が処理できないようであるが瑞希は真実のみを述べているようで彼女の瞳からは大粒の涙が零れ落ちている

「明久、落ち着くのじゃ。姫路の様子を見ると冗談では無さそうなのじゃ」

「う、うん。そ、それで姫路さん、おばさんは大丈夫なの？ そ、それに怜生くんは？」

「そ、それが今は病院に運ばれて手術中だってお母さんから電話があつて、前田さんに連絡を取りたいんだけど、おばさんの携帯電話は壊れてしまたみたいでどこに連絡したら良いかわからないって、それで、吉井くんなら、わかるんじゃないかって、怜生くんは私のお母さんと一緒に病院にいます」

秀吉は明久に落ち着くように言うと明久はまだ現実が理解できていないようであり、声を震わせながら瑞希に聞き返すと瑞希は怜奈が手術中だと言う事と理音の弟の『前田怜生』が病院にいる事を話すと明久に理音の連絡先を知らないかと聞く。

「り、リオの連絡先だね。わ、わかったよ。い、家にあるから、直ぐに帰って電話するよ。あ、あのさ。雄二、秀吉、ムッツリーニ」

「良いから行け」

「……………気にするな」

「う、うん。ごめん」

「よ、吉井くん、私も行きます」

明久は顔を真っ青にしながらも友人3人に謝るとカバンを手に取り、急いで教室を駆け出して行き、瑞希も明久の後を追いかけて行き、

「ちょ、ちよつと、吉井、危ないわよ!!」

「お姉さまにぶつかるなんて、どう言つ了見ですか!!」

明久は廊下に出た所でクラスメートのドイツからの帰国子女の少女『島田美波』とドリル型の特徴的なツインテールの髪形をした少女『清水美春』にぶつかりそうになるが、

「ゴメン。島田さん、ちよつと、かなり急いでるんだ」

「そ、そうなの？」

明久は今は美波に付き合っている暇もないため、直ぐに駆け出そうとし、美波はあまり見る事のない明久の真面目な表情に少しだけ照れたように視線を逸らした時、

「よ、吉井くん、待ってください。私も行きます」

「ひ、姫路さん？ ちよつと、大丈夫!？」

息も絶え絶えになった瑞希が明久に追いつき、明久は瑞希に駆け寄り、

「へえ、ウチには急いでるって言うわりにはその子には優しくする

んだ？」

「ちよ、ちよっと、島田さん、落ち着いてよ。今は本当にそんな事をしてる暇はないんだよ」

美波は明久の態度が気に入らないようであり、明久の肩をつかむと明久は今から自分に起きるであろう惨劇に顔を引きつらせるが、

「す、すいません。本当に時間がないんです。吉井くん、は、早くしないとおばさんが」

「そ、そうなの？」

「う、うん。ごめん。島田さん、本当にボク達は時間がないんだ。詳しい話は雄二達に聞いて。姫路さん、行こう」

「は、はい」

瑞希が明久と美波の間に割って入ると美波は2人の様子にただ事ではない事が起きた事は理解出来たようであり、2人は美波から解放されると明久の家に急ぐ。

第2問

(……3年ぶりか？　あまり、変わってはいないな)

『前田理音』は幼なじみの明久の母親が事故に遭ったと聞かされた時、戻るつもりなどなかったが彼が所属している研究所の恩師に母親の様子を見て来いと研究所を追い出され、生まれ育った街に3年ぶりに足を踏み入れるが、

(……今更、俺があっても仕方ないだろ。あいつが死のうが俺には関係ない事だ。とりあえずはアキと瑞希に会えばあのじじいも納得するだろ)

理音は自分を捨てた母親になどすでに情の一欠けらもないため、1度、病室に顔を出して研究所に戻るつもりであり、明久と瑞希から聞いた母親が入院している病院に向かおうとした時、

「ミツケタ。マイエンジェル。イエデナンカシナイデオトウサンノムネニカエツテオイデ」

「絶対にイヤですわ！！　近づかないでください。この変態！！」

道路の真ん中をドリルのような特徴的なツイントールの少女を背後におかしの気配をまとった中年男性が追いかけて回しており、

「……おかしい人間が出るのは春だけじゃないんだな。ん？　何か、こんな光景もみた事がある気がするな」

理音は2人の周りに道が開く様子に小さく首を傾げる。

「邪魔ですわ！！ どけなさい。豚野郎！！」

「ん？」

理音は一先ず、自分には関係ないと思ったようで先に進もうとした時に少女は理音に向かって駆け出して来ているだけではなく、理音が邪魔だと罵倒しているが、

「ミハル、ソノオトコハナンダ？ キサマ、マイエンジェルニナニヲスルツモリダ？」

「……意味がわからん」

なぜか、中年男性は理音へ殺意を向けると同時に理音にナイフを投げつけ、理音は表情を変える事なくナイフを弾き落とし、

「おい。あいつはなんだ？」

「放しなさい！！ 豚野郎、美春はあの変態に捕まるわけにはいかないのですわ！！」

理音に殺意が移った事で理音を餌にして逃げようとする少女の特徴的に髪を理音はつかむが少女は必至なように理音のすぐ横で彼を罵倒するが、

「知るか。だいたい、あれはお前の関係者だろ。人を巻き込むな」

「知りませんわ。豚野郎の問題であって美春には関係ありませんわ！！」

理音は美春と名乗る少女に中年をどうにかしろと言うが美春は完全に自分のせいではないと言い切り、

「…………… コロス コロス コロス コロス コロス コロス」

そんな2人の様子は中年男性には理音と美春が仲良くしているようにしか映っていないようであり、彼のまもっている殺意はさらに色濃くなっている。

「ん？ やはり、この感覚はどこかで味わったような気がするんだが、まあ、良いか。俺に敵意を向けたんだ。それなりの覚悟はできているんだろうな」

「ちょ、ちょっと、豚野郎、何をするつもりですか!？」

理音は性格なのか自分に向けられた殺意に小さく口元を緩ませ始めると美春は男性とは対象的に落ち着いた様子の理音に逆に寒気を感じているようで動けなくなってしまう、

「…………… コロス コロス コロス コロス コロス コロス」

「ん？ そう言えば、空港で引つかかると言っでじじいに没収されたんだっ たな」

男性が理音に飛びかかろうとした時、理音は懐に手を入れるが取り出そうと思ったものがなかったよう首を傾げると取り出そうとした武器の代わりに理音の拳は男性の腹に深々と突き刺さっている。

第3問

「ぶ、豚野郎、どうして、あの変態の前で普通に動けるんですか！？」

「ん？ 何を言っている。わけのわからん。殺意とか殺気とか言われるものに分類されるものは出てるが、動き的にはただの中年の親父だ」

美春は平然と男性の腹部を殴りつけた理音が信じられないように声をあげるが理音は美春の言い分がわからないように首を傾げながらも男性の攻撃を交わしては反撃を繰り返して行き、

「…………… コロス コロス コロス コロス コロス コロス」

「ほう。まだ、動くか？ タフネスは上昇していると言う事か？」

理音が男性からの敵意を受け始めてから10分が過ぎた頃には男性の動きは壊れた玩具のように鈍くなっているがその殺意は治まる事なくさらに毒々しくなっているが理音に気にする様子はなく、

「まあ、そろそろ、飽きてもきたからな」

「ちょっと、リオ、いつまでも来ないと思ってたら、何をしてるの！？」

理音は男性の相手をするのに飽きたように止めを刺そうとした時、理音と男性を取り囲んでいる野次馬達をかきわけて明久が理音を呼ぶ。

「ん？ アキか？ 相変わらずのバカ面だな」

「その罵倒はいらねえからね！！」

理音は自分の名前を呼んだのが幼なじみの明久だと気づいたようで1度、明久に視線を向けた後に彼をバカにすると明久は声をあげると、

「クロス！！」

男性は理音の視線が明久に向かった瞬間を狙ってナイフを投げつけるが、

「攻撃が単調だ。本当に殺したいなら、もっと、頭を使え」

理音は表情を変える事なく投げつけられたナイフを指で挟んで受け止め、

「お前の目的はこれだろ。別に俺はこいつに用はない」

「な、何をするんですか！？ 豚野郎、裏切るつもりですか！？」

「裏切る？ バカな事を言うな。俺はお前とは知り合いでも何でも無い。まあ、長い間、座っていたりと身体が固まっていたから、準備運動にはちょうど良かったけどな」

美春の首根っこをつかんで彼女を男性の前に突き出し、美春は助かったと思い始めていた後に地獄に叩き落とされた気分なのか理音を再度、罵倒し始める。

「ふむ。これを引き渡しても効果はなさそうか？」

「こうなったら無駄ですわ！！ 放しなさい。豚野郎！！」

しかし、男性の殺意は未だに上昇を続けており、美春はこの場所から逃げ出したいようで理音を罵倒すると、

「仕方ない。じじいに取られないように隠していたものをここで使うか？ まあ、多少はもつたないが面倒になってきたしな」

「ちょ、ちょっと、リオ、その怪しい注射器は何！？」

理音は面倒になってきたのか懐に手を伸ばすと怪しい色をした液体の入った注射器を取り出し、明久は理音の様子に声をかけるが、

「ん？ 気にするな。未承認だがただの精神安定剤だ。成分的にも血中で無害に変わるようになってる」

「未承認とか、危ない事を言わないで！？ だいたい、血中でって通常時だとどうなるんだよ！！」

「……気にするな。だいたい、承認されてたつて、効果のない抗がん剤を使っている国なんだ。たいしたことではない」

理音は気にする事なく注射器の針を男性の首筋に差し込むと注射器の中の怪しい色をした液体は男性の身体の中に吸い込まれて行き、男性は糸が切れた人形のように膝から崩れ落ちて地面に倒れ込み、

「アキ、こんな状況を以前に体験した事がある気がするんだが」

「し、知らないよ。良いから、逃げるよ」

「ちょ、ちょっと、豚野郎、放しなさい!!」

理音は明久に以前にもこんな状況はなかったかと聞くが明久はそれどころではないと判断したようで美春の首をつかんだままの理音を引っ張って逃げ出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2751y/>

サドで邪悪な召喚獣if ~ Berserker Princess ~

2011年11月10日08時13分発行